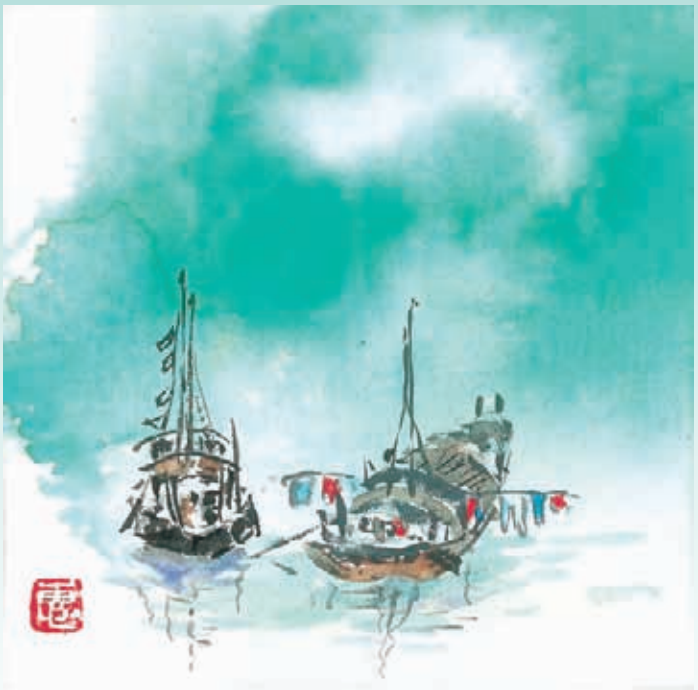
秋建時報
平成22年6月1日(第1194号)
発行／(社)秋田県建設業協会　秋田市山王四丁目３番10号
TEL　018(823)5495　FAX　018(865)2306
http://www.a-kenkyo.or.jp



「海の桂林(ヴェトナム)」絵／文　白澤 恵舟

今年三月末、機会を得て、ヴェトナムのハロン湾にスケッチ旅行した。
世界遺産、海の桂林と言われるだけに、風光は雄大、かつ明媚だった。
加えて、小舟に土産の品を積んで売りにくる水上生活者のエネルギーに、
今の日本人に失われたものの多さを強く感じた旅であった。

筆塚修復

会　長　菅原 三朗

旧大久保村新関(現潟上市昭和)の菅原源八翁は、藩政末期の寛政6年から明治12年(1794～1879)に生き、同村の肝煎を長く勤め、村民の尊敬を一身に集めた人物である。当時の藩内で優れた農村指導者として注目された人で、63歳で隠居するが、医療をほどこし、仁医として近郷の人達に慕われている。又子弟の教育にも熱心であった。花道や俳句など幅広い趣味と教養を身に付けており、随筆感想文を多く残した。これらの著述は「菅原源八遺作全集」や「上方旅日記」等にまとめられて菅原源八翁顕彰会より平成7年に刊行されている。

源八翁は生涯にわたり人のために尽くし、一農民に徹し切って誠実なる人生を全うした郷土の誇るべき立派な先覚である。

源八翁にはおおよそ180名位の門弟がおり、この中の大清水村久兵衛と大郷守村茂右衛門の両人が中心となり、師の恩に報いるため筆塚(石碑)を建立しようと同門にはかったところ一同から大賛成が得られ、師の存命中にこれが成就すれば、翁も極めて喜ばれるだろうと言うことで建立が実行されている。

これに翁も感激をされ、発起人の二人に自身のこれ迄の資料等を与え、知人を通じて当時藩中随一の学者として高名な、平元勤斎に撰文碑銘を頼み早速御承引の運びとなった。おそらく久兵衛・茂右衛門の二人の情熱と、源八翁の人柄を理解した平元勤斎が心を動かされたものと推察される。翁はこのことについていたく感銘され、身にあまる光栄であり生前の面目、死後の芳名永く世に伝わるであろうと率直に心境を述べている。

筆塚(高さ2m、巾0.9m、男鹿石)は明治3年7月上旬から彫り始め9月21日に完成している。翁は毎日の仕事ぶりを見て石工職人一同は根気よく毎日毎日休むことなく彫刻を急ぎ、下地磨きあげること、鏡面の如く表裏とも字数大凡千字に余りたり、物の見事に出来たるを賀し「男鹿石も磨けば名にたつ碑となりぬ、下氏が玉も本とはあら玉」と詠んで石工達の努力に感謝している。平元勤斎の名文と筆蹟を忠実に彫ることは至難の業であったと思われる。

同年9月25日、筆塚完成の祝が行われ多くの門弟や村人が集い、唄を歌い酒盛りに酔い往来も出来ない程の賑わいだったと伝えられている。

この筆塚(石碑)も建立以来今日迄140年を経て、石碑も傾き以前からその修復と保存対策が叫ばれておりました。潟上市の史蹟にも指定されており、本年度ようやく修復のための市の補助金も決定し、菅原源八翁顕彰会では修復工事の施行を、総会開催(7月4日)よりも前の6月28日から着工することとなった。

この筆塚(石碑)を設置仕直しの際、筆塚の内部がどのようになっているか、中にはどんな物がどのように収納されているのか、140年前のタイムカプセルの開くのが今歴史家や源八翁顕彰会員をはじめ、町の人々の大きな関心事となっている。

県協会

表彰式・第78回定時総会

災害応急対策の強化・BCP策定推進を掲げる

県協会は5月27日(木)、秋田キャッスルホテルにおいて表彰式並びに第78回定時総会を開催した。

総会に先立って行われた平成22年度表彰式では、(社)秋田県建設業協会表彰において会員企業14社、会員企業の従業員26名、事務局職員1名を表彰。併せて、(社)全国建設業協会表彰、(財)建設業福祉共済団表彰、(社)全国土木施工管理技士会連合会表彰の授与も行われ、それぞれの受賞者へ表彰状、記念品が贈られた。

第78回定時総会は表彰式に続いて開催、会員120名が出席。来賓には川嶋東北地方整備局企画部長、加藤秋田県建設交通部長が出席。

菅原会長は冒頭のあいさつで、建設業界における公共事業関係費が過去最大の削減幅となっていることに触れ、「このままでは秋田県の基幹産業である建設産業は壊滅し、地域経済の活力も著しく低下・疲弊し、再生の可能性に不安を持たざるを得ない」との危機感を示し、県内建設産業界の直面している窮状を打開するために、また、県民が将来にわたって安全・安心な生活を維持していくためには、公共事業は必要であり、福祉を充実させるためにもインフラ整備は、前提条件であるとの認識の下、街づくりプランナーの一員として、必要な社会資本整備の計画的な推進について、本会並びに各支部との総力を結集し、関係機関に働きかけて参る所存であると述べ、また、地域に根ざした産業として、災害時における応急対策業務の体制強化や平常時からの対策として事業継続計画の策定を推進し、県民の安全・安心を守るラストアンカーとしての使命を果たしていくとの考えを示し、協会事業に対しての会員の協力と理解を求めた。

議事は菅原会長が議長を務め、議案として▽平成21年度事業報告並びに収支決算▽特別会計玉川保養所事業の一般会計への統合▽建退共事業引当資産取崩▽平成22年度事業計画並びに収支予算(案)を上程。

22年度の事業計画では、6項目の重点事項を決定・承認し、その中で「建設業の健全な発展への対応」として新たに緊急時における事業継続計画(BCP)への対応を挙げている。

県協会

脇雅史参議院議員が来県

国政報告会を開催

5月17、18日の両日、脇雅史参議院議員が来県し、協会支部にて国政報告会を開催した。

脇議員は、「地域にとって良質な建設業は不可欠であり、建設業が疲弊して困るのは住民である」とした上で、議員の主張である▽安ければいいはダメ▽建設産業を守る▽技能・技術者を守るの3点を強調し「破綻しかけている建設産業の危機をともに乗り切ろう」と会員を激励した。

下記ホームページにて脇参議院議員の国会活動、コラム等を紹介されています
アドレス:http://www.waki-m.jp/

県協会

新規学卒者研修会を開催

建設業界と社会人としての基礎知識
建設業の労働災害等を学習

県協会では、平成22年度新規学卒入職者(新入社員)研修会を4月26、27日の二日間にわたり、秋田ビューホテルにおいて開催した。研修会には、この春会員企業に採用された新入社員30人が参加。

初めに菅原会長の講話があり「皆さんの生まれた時代は、すでにインフラ整備され文化の花開いた時代であったが、私の生まれた昭和初期の時代は水道も下水も整備されていない時代で自然災害による被害も大きいものであった。インフラ整備されたおかげで現在は自然災害による被害も少なくなった。やがて高度成長時代になりどんどん産業も成長していった。このようにインフラは下部構造の上になりたっており波及効果が大きい公共事業を冷遇していては景気浮揚は望めない。秋田県は人口減少や県民所得の低水準などの問題を抱えており、公共事業を増やさなければすべてはよくならない。何がなんでもふるさとを再生するためにいかなる政権であっても建設業を活性化していく必要がある。皆さんも我々と一緒になって頑張っていきましょう」と話があった。

引き続き、研修会では(株)日本コンサルタントグループの酒井誠一氏を講師に迎え、社会人としての心構え、建設業界の基礎知識、新入社員の基本(身だしなみ、挨拶、敬語の使い方、電話対応)、建設業で働くための仕事の流れと進め方、職場の安全管理について講義があった。二日目は、グループに分かれ、建設業界の仕事の流れについて設計図や見積書、工程表の作成、安全管理、施工検査など与えられた役割についての責任と協力して仕事を組み立てていくことについてゲーム感覚で学んだ。午後からは個人ワークとして自分の課題は何かを考えながらチャレンジプランの作成を行った。また、「労働災害の状況について」秋田労働局安全衛生課主任地方産業安全専門官の花岡和男氏より建設業における主な危険作業や安全対策としての一例として土止め支保工などイラストを用いた講演がなされた。

県協会・技士会・品確安全協議会

情報化施工体験研修会を開催

5月11、12日の両日、(社)秋田県建設業協会(菅原三朗会長)、秋田県土木施工管理技士会(北林一成会長)、秋田県公共工事品質確保・安全施工協議会(菅原三朗会長)三者の共催による「情報化施工体験研修会」が開催された。

この研修会は国土交通省が策定した「情報化施工戦略」について理解を深めるとともに、実働機器への試乗など、実際に「体験」することをテーマにしており、会員の技術者ら115名が参加した。

11日の午前、秋田県中央シルバーエリアにおいて第1部として座学が行われ、国土交通省東北地方整備局企画部 寺舘機械施工管理官が「東北地方整備局における情報化施工の取り組み」、(株)テクノシステムが「総合評価時代のNETIS技術」、秋田市測量業協会鈴木会長が「GNSS固定点からの情報化施工」について説明をした。

第2部の体験は11日午後、12日の午前、午後と参加者を3グループに分け、秋田市御所野の建災防教育講習所で行われた。「TS・GPSを用いた締固め」、「3D-MC GPSドーザー」では情報機材を装備したタイヤローラー、ブルドーザーに参加者が交替で試乗し、実際の動作を体験。そのほか、「TSを用いた出来形管理」、「RTK-GPSによる施工管理」、「3次元レーザースキャナ」について、実際の動作から採集データの利用例などの説明が行われた。

(財)建設業福祉共済団から　建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

http://www.a-kenkyo.or.jp

秋田水風景

Vol.13

桃洞の滝

[とうどうのたき]

北秋田市奥森吉桃洞渓谷

文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、ベンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー企画等

ひとくちに滝と言っても姿形は様々で、大きいものから小さいもの、また、クルマで気軽に行けるところから山歩きに不慣れな人には簡単にたどり着けない難攻不落の滝まである。いずれにしても、滝には日本人の琴線に触れる何かがあるのか、古来より多くの人が滝を目指して渓谷を遡上し、また、遊歩道なども整備されてきた。カメラを趣味にした人が手始めに撮ってみる被写体としてもおあつらえ向きだし、また、健康増進のために休日ごとにハイキング感覚で滝探訪をしてみるのも面白いだろう。

秋田県には見るべき滝が多い。休日ドライブで気軽に訪れることのできる滝だけでも県内各地に点在している。その一大集積地が森吉山麓。無名に近い滝まで入れたら数えきれないが、「絵になる滝」だけでも桃洞の滝、三階の滝、安の滝、幸兵衛滝などが挙げられる。険しい地形の中に点在しているので、一日で全部を回るというわけにはいかないが、山奥にもやっと遅い春が訪れたこれからの季節、天気のいい休日には滝巡りを楽しみたい。

さて、この桃洞の滝。国民宿舎森吉山荘からさらに山道を進み、車道終点にある森吉山野生鳥獣センターにクルマを止めると、そこから桃洞渓谷沿いに歩いて一時間ほどで到達できる。かなりの山奥には違いないが、渓谷沿いの遊歩道はほぼ平坦で、子ども連れでも気軽に自然探訪を楽しめる。(虫除けスプレーは持参したほうがいい)

珍しい形をした滝であるが、この桃洞の滝の「桃洞」とは何か？　それはどうやら、この滝の形から連想されるあるものに由来されるようだが、たとえ知っていても、あるいはうすうす気づいていても、あまり大きな声では話さないほうがいい類いの話題かもしれない。知らされなければ気づかない人でも、言われてみれば「あ、なるほど！」と、ピンと思い当たるものがあるハズ。先人は、なんとも単刀直入なネーミングをしてくれたものである。

“一匹のカエル”

菅　禮子

「えー　ここに一つの小さな水たまりがあったとします…」という言葉ではじまったK･T先生の第一声――その時、教室の壁をゆるがせて響き渡ったのは、箸がころげてもおかしい年頃の乙女達百数十名の大爆笑だった。

先生の声はあまりにキイの高いボーイソプラノだったのだ。それだけではない。広い額の下の大きな丸い二つの瞳は、見事なロンパリ～即ち同時に左と右を見ているのだ。

ひょろりと細長い華奢な首の上に載っかったそのお顔と声は、まさに今、宇宙からこの地球上に降り立った火星人といった風情。

一方の片隅で笑いが納まると、また別の片隅の一かたまりがドウッと吹き出すといったぐあいで、笑い声はなかなか納まらない。

わたしは少し心配になって来た。その日、京城帝大予科から転住して来られたという、少壮の教授どのの生物学の初講義とあって、二クラス合同で集まった学生たちは、期待に胸をときめかせていたのだが、今はもうその期待も肩書きも吹き飛ばして笑いのめす乙女達の※傍若無人ぶりに、先生はきっと怒ったかも……それとも恥ずかしさに立ち往生しているのでは……うつむいてなるべくそのお顔を見ないようにしていた（だってわたしだって吹き出さずにはいられなかったのだから）わたしは、おそるおそる首をもたげてその人の方を見やった。

するとその哄笑の渦の中にあって、先生は自分もさもおかしそうに笑っておられたのだ。わたしは目を瞠った。思わず胸が高鳴った。それはとても次元の高い、これまで一度も出会ったことのない、すばらしく高貴な値打ちのものが、わたしの胸中に流れ込んだ瞬間だった。

ようやく笑いの鎮まった教室でつづけられたその日の生物学の初講義の先生の一言一句は、その衝撃的な出会いのせいか、今でも暗誦できるほどわたしの胸中に刻みつけられている。

「その水たまり即ち池にある日一匹のカエルがやって来ました。カエルが池に棲みつくには、池の深さ、広さ、水温、水質、まわりの草や樹、虫や魚などの生物それらの環境がカエルの生存の条件に合わなければなりません。さてカエルはその池に棲みつきました。これを生物学では“**適応**”と言います。やがて次の年、別のカエルがやって来て、池のカエルは十匹になり、毎年カエルは増えつづけ、とうとう百匹になりました。春になると毎晩カエルの大合唱があたりを揺るがせたのです。

ある年、カラスの大群がやって来て、カエルは六十匹に減りました。またある年、疫病が流行してカエルは三十匹になり、またしばらく経ってある年、百年の一度の日照りのため、池はカラカラに干上がって、ひからびて死んだもの、他の水たまりを探しあてのない旅に出たもの、さまざまの中で、とうとうそこには一匹のカエルもいなくなりました。これを生物学では“**自然淘汰**”といいます。」

それから終戦までの数ヶ月――朝鮮半島の首都京城（現韓国ソウル）は清涼里の赤煉瓦の校舎で、祖国日本の敗色濃い苛烈な戦局、生命の瀬戸際の刻々を、あの時ほど寸暇を惜しんで勉強に打ち込んだ日々は、これまでのわたしの生涯には二度とない。防空壕掘り、食糧確保のための農場作業、軍用機のエンジンの絶縁体に使う雲母原石の加工作業、もうほとんど学課の時間は削られて、中間テストも期末テストもないといった状態だったが、点取りではない、真の学の世界に目を開かされた希望と歓びにみちた日々だった。ひもじさも作業の疲れも、空襲の恐怖も、燃え上がった向学心の前には問題ではなかったのだ。

それは皆、K先生の学問に対する熱意に感化されたからに他ならない。先生の斜視は、長年、顕微鏡を左の眼でのぞきこみながら右の眼でスケッチをしたためだということがわかり学生達はみな畏敬の眼で先生を仰ぐようになった。

昭和二十年八月、終戦間際の夏の日のことである。沖縄に米軍が上陸し、本土は空襲に焼かれ、半島にも度々空襲警報が鳴って、この次の米軍の上陸は朝鮮半島かと噂されていた。その日空襲警報があったせいか、いつもざわざわと学生達が集まっている生物教室にはわたしのほかにはだれ一人居なかった。

先生はたった一人の生徒を相手に、研究テーマとして与えて下さった「清涼台ヲ中心トスル“スミレ”ノ分布状況」について特別講義をされた。先生は少しの間、言葉をとぎらせ、茫とした瞳で窓の外を眺められた。そして言われた。

「僕の染色体の研究も、もう十年あれば完成するんですがね……」

窓の外は真青な空に積乱雲が湧き立ち、先刻どこかに避退したと思われる味方の軍用機が翼を連ねて轟々と帰って来るのが見えた。

先生はさらに語を継いだ。「もし、敵が上陸して来たら、元重機関銃部隊にいた僕は真先に半島防衛のために招集されるでしょう。その時は潔く戦って死にますよ。しかし……」そこで先生はちょっと声をのまれ、やがてまた、きっぱりとした口調で言われた。

「しかし貴女たちは、たとえどんなことがあっても生きて下さい。生きてそして何でもよいから次の代に伝えて下さい。僕と共に学習した草花や虫の生きる姿、いつか星についてお話した宇宙の神秘や、佛像に表現された美の伝統。学の世界のひろやかさ……なんでもよいから次の代に伝えて下さい」

当時十六歳で稚かったわたしには先生の“どんなことがあっても”という言葉の意味の深さがわからなかった。――オメオメとひそみ隠れて生きるより、最後まで徹底抗戦して、白虎隊の少年達や、沖縄のひめゆり部隊のように自裁するのが筋だろうに――先生はなぜ七生報国を叫ぶ国の風潮とは反対に“生きよ”と言われるのだろうか？そんな考えがわたしの心の中に往来していた。

今考えると、もの皆ヒステリックに死の覚悟を説く極限状態の中で、科学、芸術すべてを包括した人間の生命体を未来に継承して行くように――という生物科学者としての、それは希いであり、命題であったのだろう――**自分は戦って死ぬが君達は生き残れ！生きてなにかを子孫に伝えよ**――

一匹のカエルは生き残った。はるばると人生の旅をし、辿りついた21世紀の今涸れようとしている水たまりの中に日々を生きている。

※傍若無人――人を人とも思わぬ気ままなふるまい